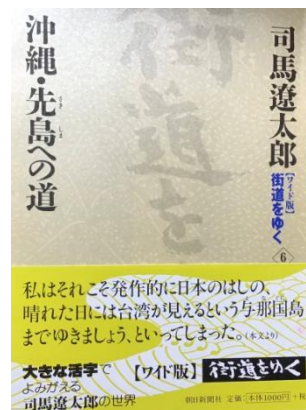


沖縄・先島への道

今年は司馬遼太郎「生誕 100 年」ということで、書店にコーナーが設けられていた。つい写真の本を手にとった。大きな活字のワイド版であり、司馬作品らしいタッチで書かれていて、一気に読みすすんだ。「街道をゆく」沖縄編であり、那覇・糸満、石垣・竹富島、与那国島から構成されている。

沖縄戦に関連した軍隊についての指摘に注目した。「軍隊は住民を守るためにあるのではないか。しかし、その後、自分の考えが誤りであることに気づいた。軍隊というものは本来、つまり本質としても機能としても、自国の住民を守るものではない、ということである。軍隊は軍隊そのものを守る。この軍隊の本質と摂理というものは、古今東西の軍隊に通じ、ほとんど稀有の例外をのぞいてはすべての軍隊に通じるように思える。」



沖縄では再び戦場になるのでは、という不安の声が高まっている。沖縄県南西諸島で急速に進む軍事力増強に注目が集まる。『放送レポート』2023年7月号、沖縄問題取材班「拝啓 沖縄より」から。沖縄に自衛隊が駐屯を始めたのは1972年の日本復帰後だ。当時の沖縄では激しい反対運動が起きた。住民を巻き込んだ沖縄戦の記憶が色濃かった。日本兵が住民を避難壕から追い出し、食糧を奪い、スパイと決めつけて殺害した。県民の4人に1人が亡くなったといわれる沖縄戦で「米兵より日本兵の方が怖かった」という体験者の声を何度も聞いたことがある。自衛隊の受け入れには大きな抵抗があった。望まぬ形での日本復帰も自衛隊への反発を強めた。過重な基地負担による苦しみや抑圧から解放されるはずが、多くの米軍基地が残った。その上に駐留を始めた自衛隊は、新たな基地負担の象徴だった。

日本復帰から50年が過ぎ、戦争の記憶が薄れたほか、広報活動などが身を結ぶ形で、自衛隊は沖縄の中に“浸食”している。朝日新聞などの調査で、復帰直後の1972年7月には、沖縄県内の自衛隊配備に「賛成」22%、「反対」55%だった。復帰50年の2022年調査では、沖縄の自衛隊を「現状でいく」50%、「強化する」33%、「縮小する」11%だった。琉球列島での防衛力強化を進める南西シフトを「よいことだ」と評価したのは57%で「よくないことだ」の26%を大きく上回った。台湾有事の武力衝突に巻き込まれる不安を感じると答えたのは85%だった。不安を背景とした自衛隊の“浸食”は、数値化されている。北朝鮮の核ミサイル開発や、中国の脅威、台湾有事などは沖縄に限らず、日本全体の問題であるはずだ。それが、沖縄への米軍基地の集中や南西諸島での防衛力強化を肯定し、正当化するために、根拠や詳しい説明なしに使われている。

(2023年8月22日)